

郭沫若と『社会組織と社会革命に関する若干の考察』
(河上肇著) についてのノート (上)
— 「革命文学」論争覚え書き (5)

中井 政喜

目 次

- I はじめに
- II 『社会組織と社会革命』についての郭沫若の言及
- III 影響関係の明瞭な点について
(以上 今号)
- IV 影響を受けつつ反論した点について
- V 文芸理論の基礎として受容した可能性のある点について

I はじめに

このノートの第一の目的は、郭沫若がどのように或いはどのような点において河上肇博士（以下敬称を略する）の『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（弘文堂書房、1922・12・5）⁽¹⁾を受容したのかについて、整理し検証することにある。そのために、郭沫若が『社会組織と社会革命（社会组织与社会革命）』（商務印書館、1925・5）の翻訳を完成した1924年7月頃⁽²⁾以降展開する所論と、河上肇の所論とを、具体的につき合わせてみたい。

但し、上記の課題を追求する時において、次の点に留意しておきたい。それは、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』の内容自体がマルクス主義を受容形成する過程における河上肇の一階程を記す性質のものであった、ということである。⁽³⁾さらにまた、当時（1924年半ば以降）において郭沫

若も同じくマルクス主義の受容形成過程にあったことは言うまでもない。したがって郭沫若が、河上肇の所論と接触し受容することを通じて、当時の中国の状況下において、どのような課題とどのようにとりくもうとしたのか、⁽⁴⁾ について、私は言及したい。これが小論の第二の目的である。

また第三に、文芸理論と関係する点において、明確な表現が見られないうちにも、郭沫若が河上肇の所論から影響を受けている点はないかどうか、若干の推測を提出してみたい。⁽⁵⁾

II 『社会組織与社会革命』についての郭沫若の言及

一. 『社会組織与社会革命』の版本

私が目にするのできた郭沫若訳『社会組織与社会革命』の版本は以下の三種類である。

1. 『社会組織与社会革命』（原著者 日本河上肇、訳述者 郭沫若、商務印書館、1925年5月、縦組、河上肇原序2頁、目次6頁、本文288頁、沫若附白<1924年7月1日>。上海図書館所蔵⁽⁶⁾）

2. 『社会組織与社会革命』（著者 日本河上肇、訳述者 郭沫若、嘉陵書店、1932年5月5版、縦組、河上肇原序2頁、目次6頁、本文293頁、沫若附白<1924年7月1日>。北京大学図書館所蔵⁽⁷⁾）

3. 『社会組織与社会革命』（原著者 河上肇、訳述者 郭沫若、上海商務印書館、1951年7月第2版、横組、序<郭沫若>3頁、原序2頁、目次4頁、本文263頁、沫若附白<1924年7月1日>。中国科学院図書館所蔵⁽⁸⁾）

以下の記述においては、主として1925年5月初版の『社会組織与社会革命』に依拠することにする。

二. 郭沫若の言及

1924年以降における郭沫若の思想的転換（マルクス主義の受容）に際しては、河上肇の『社会組織与社会革命に関する若干の考察』の翻訳が非常に大きな作用を果たした、と思われる。⁽⁹⁾ このことは郭沫若自身の言葉によって周知されている。郭沫若は、成仿吾宛て書簡、「孤鴻」（1924・8・9、『創造月刊』第1巻2期、1926・4・16）において次のように語った。

「当初ここ（福岡を指す—中井注）に来た私の生活の計画は、『社会組織と社会革命』の一書を翻訳することでした。この本の翻訳は君が余り賛成してくれないことで、私も、この本の内容について決して十分には満足できませんでした。例えば彼（河上肇—中井注）が早期の政治革命の企図に不賛成なのは、マルクスの本意ではない、と思ったりしましたが、しかしこの本を訳し終えて教えられた所は実に少ない、と思います。私はこれまで只漫然と個人資本主義⁽¹⁰⁾に憎悪を抱き、社会革命に信仰を持っていましたが、それは今やさらに理性のバックライトを得て、いちずな感情的作用ではなくなりました。この本の翻訳は私の一生の中で転換期を作り出しました。半睡状態から私を呼び覚してくれたものはこれですし、岐路の彷徨から私を引き出してくれたのはこれであり、死の暗影から私を救い出してくれたものはこれなのです。私は作者に非常に感謝しています、私はマルクス・レーニンに深謝し、私がこの本を翻訳するのを援助してくれた友人達にも非常に感謝しています。私は二ヶ月ほど費やしてこの本を訳し終えましたが、訳述する中で私の最も驚いたのは、平素少くとも私達が暴徒と見なしていたレーニンやトロツキー等の人々がいかに緻密な頭脳を持ち、いかにまじめな学者であったか、ということです。」（「孤鴻」、1924・8・9、前掲）

また、1924年7月22日付け何公敢宛て書簡（「社会革命的時機」<1926・1・19、『洪水』第1巻10・11期、1926・2・5>所引）において郭沫若は次のように言う。

「私は社会・経済の諸科学については元来深い研究をしておりません。只、マルクス主義に対してはある種の信仰心を持っていました。近頃、『社会組織と社会革命』の一書を翻訳し終えた後、この信心はますます堅固となりました。」（1924・7・22、何公敢宛て書簡⁽¹¹⁾）

では、具体的にどのような点で郭沫若は河上肇の考え方を受容したのであろうか。

III 影響関係の明瞭な点について

以下、影響関係のあると思われる点を項目に分け、河上肇と郭沫若の論点

を対比してみることにする。

一、共産主義革命の過程をめぐって

1. マルクスの三つの時期区分について

まず河上肇の所論から見てみたい。河上肇は、1875年5月5日付けブラッケ宛てマルクスの書簡⁽¹²⁾に依拠して、次のように論ずる。

「この手紙を見ると、マルクスの所謂共産主義には二期の区別があつて、その第一期は半成期とも謂うべきものであり、第二期は完成期とも謂うべきものであり、且つ此等二つの時期の前に、資本主義の社会から共産主義の社会への過渡期がある。」（『社会組織と社会革命に関する若干の考察』、「下篇 第1章 資本主義より共産主義への推移の過程—マルクスの理想及び其の実現の過程」⁽¹³⁾）

この「過渡期」の内容について河上肇はさらに、「其れは、経済方面から言えば『革命的変革の時期』であり、政治方面から言えば『無産者の革命的執権』という『政治的過渡期』に属する」（同上⁽¹⁴⁾）、と言う。また『共産党宣言』を引用しつつ、やや補充を加えて次のように指摘する。

「要するに之を政治方面から言えば、無産者の執権が行われ、之を経済方面から言えば、一切の生産手段が国有とせらるることにより革命的変革が実現せらるるのである。」（同上⁽¹⁵⁾）

次に「半成期」について、河上肇は以下のように論及する。

「過渡期が完結すれば、社会は共産主義の時代に這入る。しかしマルクスの思想の特徴は、歴史的発展に重きを置く点に在る。（中略）此の事は、彼をして完成されたる共産主義の一挙にして実現し得べからざることを、信ぜしむるに至った。そこで彼れの考によれば共産主義は先ず半成期を經過して、然る後その完成期に入るべきものである。」（同上⁽¹⁶⁾）

「過渡期が完結したならば、経済方面に於ては、あらゆる生産手段の国有が実現されて仕まう。（中略）マルクスの考によれば、この生産手段の国家的統一と労働の社会的結合とによる『全生産方法の変革』は、必然的に巨大なる生産力の増加を齎すものである。」（同上⁽¹⁷⁾）

「そこには生産手段を私有して不労所得を得つつある階級は無い、総ての人が社会の労働者として働いて居り、その提供した労働に応じて社会から各々一定の報酬を受けている。各個人は『一つの形に於て社会に与えた所のものと、同じ分量の労働を、他の形に於て取り返す』という点に於て、

そこには所謂『労働収益全部に対する権利』が実現されている、と言っても可い。」(同上)⁽¹⁸⁾

また「完成期」について河上肇は、「共産主義が『其の固有の基礎の上に発展する』時は、早晚社会の生産力は巨大なる発展を為し、遂には各人の生存を保証することが必ずしも困難でないようになる。そうになると、共産主義はその半成期を経過して始めて其の完成期に入る」(同上)⁽¹⁹⁾、と言う。河上肇はブラック宛てマルクスの手紙の次の一節を引用する。

「『個人の全面的発展と共に、生産力が亦た増加し、共同の富の一切の源が十分に流れ出された後、一その時始めて、(中略)社会は其の旗印の上にく各人は其の能力に応じて、各人には其の欲望に応じて>(中略)ということを書き得ることになる。』」(同上)⁽²⁰⁾

さて、これらの問題に関して、一方、郭沫若は次のように論ずる。

「共産主義革命は決して、今日革命すれば、社会上の財産をただちに共有する、というものではない。共産社会はもちろん共産主義者の目標であり、大同世界が孔子の目標であるのと同じである。しかし彼らはこの目標に到達しようとする時、決して一步で跳躍できるものとはせず、彼らにも一定の段取りがある。私達はマルクスが共産主義の開祖であると知ってはいるが、ただ彼は、共産革命の経過には三つの時期を含む、と言う。第一番目は、国家の力で資本を集中する、第二番目は、共有しうる産業の発展に対して国家の力によって努力する、第三番目は、産業が共有できる程度に到達して、その後みんなが始めて、『各々その能力を尽くし、各々その必要とするものを取る』ように、共産的理想の社会を営む。」(「窮漢的窮談」、1925・10・19、『洪水』第1巻4号、1925・11・1)

また他の場所では次のように言及する。

「マルクスは社会革命を三つの時期に分ける。無産階級執権(原文は無産階級專政—中井注)の後において、なお『共産主義の半成期』があり、すべての生産と分配は国家の権力によって行われる。国家は生産力をその限界まで発展することに努める必要があり、その後始めて完成した共産主義に移行できる。」(「到宜興去」、1924・12、『孤軍』第3巻3、4、5期、1925・8、9、10、底本は、『学生時代 沫若自伝第2巻』<三聯書店、1978・11>)

マルクスの三つの時期区分とそれぞれの内容について、河上肇と郭沫若の

見解がほぼ重なり合っているものであることが分かる。

2. レーニンの三つの時期区分について

共産主義革命の過程に対するレーニンの三つの時期区分について、河上肇は以下のように論ずる。河上肇は主としてレーニンの「The Soviet at Work」(1918)に依拠して、次のように指摘する。

「社会主義革命の歴史は大体において三期に分つことが出来る。第一期は主として精神的準備の時代であり、第二期は主として政治的戦闘の時代であり、第三期は主として経済的経営の時代である。そうして此の区別は、私の知っている範囲では、レーニンの諸著に最も明白に言い現されているようである。」(『社会組織と社会革命に関する若干の考察』、「下篇 第5章 露西亜革命と社会主義革命」、傍点は原著による)⁽²¹⁾

また河上肇はこれを図示し、ヒルキットの説を右段に付け加えて、次のように示す。

社会主義革命	精神の準備（主義宣伝）の時期— 政治的戦闘（有産者征服）の時期— 経済的経営（産業経営）の時期—	先革命の闘争期 革命の闘争期 （政治革命の遂行） 革命後の闘争期 （反革命の鎮圧） （ヒルキットの期間別には此の時期を含まず）」
--------	--	---

(同上)⁽²³⁾

河上肇は、政治的戦闘時期の開始がマルクスの言う「過渡期」に入ることを意味する、とする。

「要するに、政治革命により、社会主義革命の歴史の第二期たる政治的戦闘期が開始せらるると共に、社会は始めてマルクスの所謂『過渡期』（資本主義の社会から社会主義の社会への）に這入る。そうして其の過渡期は、第三期の経済的経営期の長引くに従うて長引く。」(同上)⁽²⁴⁾

一方、郭沫若は何公敢宛て書簡において、この問題について次のように言う。

「社会革命は元元一飛びになしうるものではなく、世界の社会主義者も恐らく一飛びに共産主義制度を実現したい、と軽率に考えてはいないでしょ

う。社会革命の急先鋒レーニンは、社会革命を三つの時期に分けています。
（一）宣伝時期、（二）戦闘時期、（三）経営時期。ここからこの指導者の頭脳が周到緻密であり、同時に後進者に平坦な道を実際的に指し示していることが分かります。」（1924年7月22日、何公敢宛て書簡、前掲）

郭沫若はそれをマルクスの三つの時期区分と比較し、図表として示す。

「マルクス自身が共産革命を三つの時期に分けていることは、〈窮漢的窮談〉の中ですでに述べたことがある。さらに上の書簡で引用したレーニンの言う三つの時期（『The Soviet at Work』）によって両者比較してみると、下の表のようにすることができる。

レーニン	}	精神的準備（主義の宣伝）時期	}	マルクス
		政治的戦闘（有産者の征服）時期…革命的変革時期		
		経済的経営（産業の経営）時期… 共産主義の半成期 共産主義の完成期		

（「社会革命的時機」、1926・1・19）

ここでも、郭沫若が河上肇の所論に依拠し受容しながら、レーニンの時期区分とマルクスの時期区分とを結合し表示しているもの、と思われる。⁽²⁵⁾

二、共産主義革命の三つの時期がどれくらいの年月を必要とするか、をめぐって

上記の共産主義革命の過程と関連して、その必要とする年月について河上肇は次のように指摘する。

「所謂過渡期はどれ位続くものであろう？又共産主義の第一期（半成期を指す—中井注）はどれほどの長さに亘るものであろう？マルクスは何んとも之に答えていない。レーニンも wir wissen es nicht und können es nicht wissen（吾々は知らない、又知ることも出来ない）と言っている。」

（『社会組織と社会革命に関する若干の考察』、「下篇 第1章 資本主義より共産主義への推移の過程—マルクスの理想及び其の実現の過程—」⁽²⁶⁾）
一方、これについて郭沫若は以下のように言及する。

「共産革命はこの三つの時期（マルクスの三つの時期を指す—中井注）を経過してこそ成功しうる。しかもこの三つの時期がどれくらいの年月を経過しなければならないのか、私達は知りようがない。実際のところマルクス自身でさえも知りようがない。」（「窮漢的窮談」、1925・10・19、前掲）

この問題についても、両者の指摘はほぼ一致している、と思われる。⁽²⁷⁾

三．国家資本主義の位置づけをめぐって

次に、1920年代初め実行されたソビエト・ロシアの政策が国家資本主義を目指すものであったこと、また、国家資本主義の励行は産業の発達の遅れた国において共産革命が必ずとる形式・道筋である、とする論点について対比してみる。

河上肇は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』の「下篇 第6章 政治革命後における露西亜の経済的地位」において、レーニンの「農業税の意義」（『Soviet Russia』第5巻1号、1921・7）を翻訳し紹介している。

レーニンは社会主義にとって必須の二つの条件を指摘する。

「社会主義は、科学上の最新の智識に従って建てられた大規模の資本家的技術なくしては、又数百万の人間をば、生産物の生産及び分配に関する同一標準の厳密なる遵守に服従せしむる所の、系統的なる国家組織なくしては、到底不可能である。（中略）

社会主義は、更に之に加うるに、国家における無産者の支配なくしては、また不可能である。」（「農業税の意義」）⁽²⁸⁾

1918年当時、ドイツは経済的・産業的・社会的諸条件を社会主義のために備えた国であり、一方ロシアは社会主義のために政治的諸条件を備えている、と言う。その上でレーニンは、ロシアに現存する社会経済層を、一．家長的な幼稚な「農民生産」（「農業税の意義」）、二．小規模な商品生産（同上）、三．私的資本主義（同上）、四．国家資本主義（同上）、五．社会主義（同上）⁽²⁹⁾と分析列举する。レーニンによれば、無産者の執権の確立したロシアにおける現在の課題は、優勢を占める小ブルジョア、及び私的資本主義を国家資本主義の道に沿って発展させ、その段階を通して社会主義に至ることである、とする。レーニンは、「脅しつつあるカタストロフ（危機）及び之が対策」（1917・9）を引用して、「『国家的独占の資本主義は社会主義のために最も完全な物質的準備である、それは社会主義への<玄関>である、それは歴史という梯子段の中にある階段の一つで、此の階段と社会主義と称せらるる階段との途中には、介在している階段は一つもない。』」（「農業税の意義」）⁽³⁰⁾とし、「物質的、経済的、産業的の意味に於ては、

吾々はまだ社会主義の『玄関』にも達していないと云うこと、及び未だ達せざる此の『玄関』を経由してでなければ社会主義に這入るべき道は外にない」（同上）⁽³¹⁾ことを論ずる。

そのため先ずレーニンは、内戦により疲弊した農民の地位を改善し生産力を増加し、ひいては国民産業の発展を引き出すために、食料強制徴発の代りに農業税を採用した。レーニンは、これにより小資本家的産業の発展を促しながら、それを国家資本主義へ導こうとする。また利権割譲政策（一定期間外国資本に経営権・利権を契約に基づいて譲る政策）の採用によって、大規模生産を起こして国家資本主義を育成することを展望する。同時に小企業の組合を組織し（「組合的」資本主義）、将来大経営へ移行させることができる可能性を、またそれらへ大多数の人口を含みこむことによって先資本主義的諸関係を除去する可能性をも、展望している。

「資本主義は社会主義に比ぶれば一の害悪だ。けれども中世的制度と、小規模生産と、小規模生産者の分散に伴う官僚政治とに比ぶれば、資本主義はまた一の慶福だ。吾々が小規模生産から社会主義への直接の推移を実現することがまだ出来ない限り、その範囲に於て、或る程度の資本主義は小規模生産及び交換の本質的産物として避くべからざるものであり、又その範囲に於て、吾々は資本主義をば（特に其れを国家資本主義への道に沿うて導くことに於て）、小規模生産と社会主義との間における途中の連鎖として、吾国の生産力を高めるための手段、道行、方法として、利用しなければならぬのである。」（同上）⁽³²⁾

もちろんここには、政権が無産政党の手にあることが前提となっていた。

一方、この点について郭沫若は以下のように論ずる。

「第一第二の革命（マルクスの共産革命における過渡期と半成期を指す一中井注）の途上においては、いわゆる共産主義とは明らかになまごうことない国家資本主義ではないか。さらに私達にはそれを証明する事実もある。私達の知つてのとおり、ロシアは共産革命を実行している国家であるが、今、まぎれもなく国家資本主義を実行している。」（「弱漢的窮談」、1925・10・19、前掲）

また郭沫若は、半植民地の状態下にある中国において、どのような中国変革が可能であるのか、について次のように言う。

「私達は現在共同管理を恐れている時ではなく、どのようにすれば、この

既成の経済的国際共管の下から離脱できるか、を考えるべき時なのだ。外国人は極めて強大な経済的戦闘力をもって私達に君臨しており、私達は知らずしらずのうちに、無条件で私達のこの世界最大の、しかもほとんど唯一の市場を彼らに提供している。(中略)唯一の活路は、彼らの経済的侵略に徹底して反抗することではないのか。彼らの経済的侵略に反抗しようとすれば、その第一歩の手段は彼らを保護する諸条約を廃棄し、その後相当の資本を集中して、経済場裏で彼らと死戦を決するべきではないのか。

(中略)私達一国の中で資本を最大程度まで集中させようのは、国家を単位として、国家の権力で国家資本主義を実行することにのみあるのではないか。また言い換えれば、全国の私有財産を国家の手に収集し、国家を単位として産業を向上させるよう努力し、外国人の侵略を防ぐことのみがありうるのではないか。こうなると、共産党人が話をしなくてはならなくなる。私は共産党人ではないけれども、マルクス主義について、靈光氏の本を借りて少し研究したことがある(私の翻訳した河上肇著『社会組織与社会革命』の原本は、靈光氏が私に借してくれたものである)。国家資本主義の励行は、産業の遅れた国で共産主義革命が必ず取る形式である、と私は思う。それならば共産革命を実行することが共管に抵抗することではないのか。共産革命を実行するとは国家主義を実行することではなからうか。」

(「共産与共管」、『洪水』第1巻5号、1925・11・16)

また、「一個偉大的教訓」(1925・4・26、『晨报副刊』第96号、労働節記念号、1925・5・1)で、郭沫若は、第一次世界大戦期における中国紡績工業の勃興と、大戦終結後の衰退破産を例として引きながら、次のように言う。

「絶大な教訓はここにある。すなわち個人資本主義がたとえもっとも人間性の自然に合うとしても、たとえそれが自然な発展の中で社会主義の実現を促進する様々の可能性を持つものとしても、しかし現在の中国においてはその発達を期待する希望はなくなっている。

私達がもしも永遠に人の奴隷となることを望まないなら、永遠に世界の資本主義国家の従属国となることを望まないのなら、私達中国人には歩いていくのに良い一本の道が残されているだけである—すなわち国家資本主義の政策を採用して社会主義の実現を期するのである、労農ロシアがこの一本の道を歩いており、それは私達の道を切り開く先鋒である。」

(「一個偉大的教訓」、1925・4・26)⁽³³⁾

それ故に郭沫若は次のように言う。「絶対的な国家権力がなければ発達できないものであるとすれば、私達は当然より近い道筋を取るべきである」（何公敢宛て書簡、1924・7・22）として、1924年当時の『孤軍』派の国営政策に賛成しつつ、さらに、「この政策の先決条件は現政府を押し倒さなければならないことです」（同上）、とする。郭沫若は、国家資本主義を推し進めるためには、現政府を打倒する政治革命が必要なのだ、と考える。

このように、この場合郭沫若は、河上肇の翻訳するレーニンの所論をそのまま祖述しているのではない。郭沫若は、1920年代半ば頃旧中国の置かれた世界上の経済・政治的現況に立って、共産主義革命における政治革命を経た後の、国家資本主義の必須性を説くものである。しかしそれとともに、郭沫若のこの立論の根底には、産業の発達の遅れた国において社会主義へ至る一つの必須な経済的条件としての国家資本主義に対するレーニンの位置づけがあり、⁽³⁴⁾同時に、もう一つの条件としての無産者の執権（政治革命）の必須性に対するレーニンの指摘が存在している、と思われる。（政治革命を経ての社会革命という点は、河上肇が繰り返し指摘した点でもある。）⁽³⁵⁾

[注]

- (1) : 私が目にすることのできた『社会組織と社会革命に関する若干の考察』の版本は以下の三種類である。

1. 『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（河上肇、京都弘文堂書房、1924年〈大正13年〉3月10日、第10版、序5頁、目次2頁、細目7頁、本文590頁、上越教育大学図書館所蔵、背表紙・奥付は、『社会組織と社会革命』とする。なお、初版は、1922年〈大正11年〉12月5日と記す。）

2. 『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（河上肇、京都弘文堂書房、1925年〈大正14年〉3月1日、第13版、序5頁、目次2頁、細目7頁、本文590頁、背表紙は破損、奥付には、『社会組織と社会革命』と記す。初版の日付は上と同じ。）

3. 『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（河上肇、『河上肇全集』第12巻〈岩波書店、1982年8月24日、底本は第14版、1926・2・1〉所収。「中篇 第4章 社会主義制の下における個人の生活（翻訳）」の訳文が省略され、「下篇 第6章 政治革命後における露西亜の経済的地位（翻訳）」の訳文が省略されている。）

この小論においては、現在私の手もとにある、2の第13版に主として依拠する。引用の仕方は、旧仮名づかいは現代仮名づかいに、旧字体は新字体に、それぞれ改め、送り仮名はそのままとし、ルビは省略する。以下同じ。

- (2) : 『創造十年続編』（上海北新書局、1938・1、底本は、『学生時代 沫若自伝第二巻』〈三聯書店、1978・11〉）第2章の記載によると、郭沫若は、1924年4月18日付成仿吾宛て書簡を引用し、「半月以来河上肇の『社会組織と社会革命』の訳読にかかりきっています。恐らくなお三週間あれば終えることができるでしょう」、とする。また同じ第2章で郭沫若は、「朝早くから深夜まで書き、50日間書いてとうとう二十万字以上の大著を訳し終えた」、としており、ここからすると、1924年5月中には初稿を完成していることになる。『郭沫若年譜 上』（龔濟民等編、天津人民出版社、1982・5）が1924年5月下旬の項に、「『社会組織与社会革命』（〈日〉河上肇作）

訳し終る、二ヶ月近くを費す」、とするのは、『創造十年続編』の記事による、と思われる。

ただ、『社会組織与社会革命』「下篇 第六章 政治革命後俄羅斯之經濟的地位」の「沫若附白」によれば、「民国13年7月1日夜半校訂後此れを記す」とあるので、1924年7月1日のこの時点が商務印書館版『社会組織与社会革命』（1925・5）の最終稿の完成時、と考えておきたい。

- (3) : 私が目を通した河上肇に関する研究書・論考は、不勉強のため以下のものに止まる。
- 「河上肇の人と思想」（大内兵衛、『河上肇 現代日本思想大系19』、筑摩書房、1964・2・10）
- 『河上肇』（古田光、東京大学出版会、1976・11・1）
- 「『ある日の講話』の河上肇」（内田義彦、『作品としての社会科学』＜岩波書店、1981・2・10＞所収）
- 「河上肇一つの試論」（同上）
- 『河上肇 芸術と人生』（杉原四郎・一海知義、新評論、1982・1・10）
- 『河上肇そして中国—尽日魂飛万里天—』（一海知義、岩波書店、1982・8・10）
- 「河上肇 人間像と思想像」（住谷一彦、『河上肇 日本の名著49』＜中央公論社、1984・12・20＞所収）
- 『河上肇—日本のマルクス主義者の肖像』（ゲール・L・バーンスタイン著、清水靖久等訳、ミネルヴァ書房、1991・11・30）
- (4) : その場合、小谷一郎氏の論文、1. 「《孤軍派》と郭沫若」（『創造社研究』＜伊藤虎丸編、アジア出版、1979・10＞に補注＜6＞として所収）、2. 「郭沫若と1920年代中国の『国家主義』、＜孤軍＞派をめぐって—郭沫若『革命文学』論提唱、広東行、北伐参加の背景とその意味」（『東洋文化』第74号、1994・3・24）が指摘するように、郭沫若の議論は『孤軍』派との論争の中で表明されたものと言える。この小論で私の検討する所は、『孤軍』派との論争を通じて郭沫若の表明した思想が、河上肇の所論からどのような影響を受けているものか、或いは反論しようとしているものか、という点であり、この点を自分なりに明らかにしたいと思う。

なお、郭沫若が河上肇の思想に引かれていく直接的契機となったものには、恐らく『孤軍』派の人々（陳慎侯・林靈光等）との交流による所がある、と思われる。

また郭沫若と河上肇との関係を論じた専論には、私の目に触れた限りで次のものがある。1. 「河上肇学説：郭沫若前期文芸思想転変的『中介』」（靳明全、『郭沫若縦横論』、王錦厚等編、成都出版社、1992・9）、2. 「翻訳『社会組織与社会革命』所起的影響和作用」（葉桂生、同上）。これらの内容については、適宜後の注で触れることとしたい。

- (5) : 郭沫若の文芸観の推移について私なりの見方で論じたことがある（「郭沫若『革命与文学』における『革命文学』提唱についてのノート<上>」、『言語文化論集』第12巻2号、名古屋大学総合言語センター、1991・3・30、「郭沫若『革命与文学』における『革命文学』提唱についてのノート<下>」、『言語文化論集』第13巻1号、名古屋大学言語文化部、1991・11・30）。ここでは、郭沫若の社会・経済観の前進の内容にかかわる角度からこの問題をとりあげてみたい。
- (6) : この版本（以下、1925年版とも呼ぶ）の複印は、中国社会科学院文学研究所研究員（教授）楊義氏によって紹介された上海教育学院中文系副教授馮鈞国氏の骨折りを経て、手に入れることができました。ここに記して両先生に心よりお礼申し上げます。（なお、『河上肇そして中国』<一海知義、前掲>の「Ⅱ 河上肇と中国革命」によれば、京都大学経済学部所蔵の一本がある。これは、そこに印刷された表題の書き方から判断して、1925年版と思われる。未見。）

この版本は、『創造十年続編』（上海北新書局、1938・1、前掲）によれば、発行後まもなく商務印書館が自ら出版を止めた、と言う。また、1951年改版重印本（第2版）の郭沫若「序」（1950・10・23）によれば、そのため世の中に流通した部数も少なかった、とする。

なお、河上肇は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「下編 第6章 政治革命後における露西亜の経済的地位」において、『Soviet Russia』第5巻1号（1921・7）の「農業税の意義」を翻訳している。その時河上肇は、最後の数行を省略した。郭沫若は、この省略された部分を、何公敢から借用した『Soviet Russia』によって補い

訳出している。その部分は以下のとおりである。（中国語原文の引用については、できる限り簡体字を用いることにする。以下同じ。）

「我们要堅毅和患害斗争，我们不能不大胆地和患害覩面。大工业建设之不得不延期，工业与农业的产物交换之不能禁止，既已经昭示了我们，我们不能不依赖更容易着手的小工业之建设。我们不能不从这一方面动工，以支持我们这一方面的残局，这几几乎被战争与封锁全盘毁灭了。我们无论如何不能不采取一切的手段以使交易发展，我们不怕资本主义，因为资本主义底范围由于地主与有产阶级之经济的废灭，由于劳农政府之存在，已经十分受了限制，十分受了调节了。这是农业税之根本观念，这是它经济的意义。」（『社会组织与社会革命』、「下篇 第6章 第8节 向社会主义之推移」、商务印书馆、1925.5）

こうした補足とは逆に、郭沫若の翻訳には省略部分も見うけられる。例えば、河上肇『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（第13版）「下篇 第5章 第8項 經濟的經營（産業經營）期と社会主義革命の成就」における551頁8行目から553頁1行目にかけて、小泉信三の『社会組織の經濟理論的批評』からの引用がなされている。しかし郭沫若の翻訳はこれをすべて省略する。そのため553頁のこれに関連する記述（553頁4行目から6行目まで、また同頁11行目から14行目まで）も省略される。

こうした類の省略部分があるのは事実であるが、郭沫若の翻訳を原本とつきあわせて見た場合、概して言えば、ほぼ、非常に忠実な翻訳と言える。

(7) : この版本（以下、1932年版とも呼ぶ）は、1925年版と比べると、河上肇序の日付部分が次のように変更されている。

1. 「本书是由1921年3月至1922年10月，将近两年间隔时所发表过的论文纂集成的。（中略）

1922年初冬 河上肇」（商务印书馆、1925年5月）

2. 「本书是由1925年3月至1926年10月，将近两年间隔时所发表过的论文纂集成的。（中略）

1926年初冬 河上肇」（嘉陵书店、1932年5月）

この事實はつとに、『郭沫若研究資料（下）』（王訓昭等編、中国社

会科学出版社、1986・8）の『社会組織与社会革命』の項（263頁）で指摘されている。

- (8) : この版本（以下、1951年版とも呼ぶ）の郭沫若「序」（1950・10・23）によれば、商務印書館はこの本を改版重印版として出版する時、郭沫若に時間的余裕がなかったため、吳沢炎に依頼して校訂したものと、言う。郭沫若は、吳沢炎の校訂を経て訳文が一層中国語らしくなったことに感謝している。

なお吳沢炎は校訂にあたって、郭沫若にいくつかの意見を述べている。郭沫若はそれを引用しつつ、次のように言う。

「『河上肇の原文には、まゝ意識の在り方の余り精確でない所があります。（中略）その発言は必ずしもすべて適切というものではありません。』

これは少しも間違いのないことであつて、読者は注意されたい。

『書中トロツキーの三ヶ所の言論は、すでに削除しました。』

私はまったく賛成する。私は、河上肇は亡くなったが、彼もまったく賛成であろう、と信ずる。

『下篇第6章はレーニン著<農業税の意義>の翻訳であり、英独文に基づいて訳出しています。露語本《レーニン選集二巻本下巻》とはいささか齟齬があり、削除しても良いようです。』

私は、やはりそれは残しておく方が良い、と思う。『いささか齟齬がある』けれども、歪曲や誤りはない。留めておくことが、本書全体の内容を一層的確なものにさせるし、河上博士が当時一步邁進しようとした方向を示すことにもなる。」（「序」、1950・10・23）

故にこの版本は、吳沢炎によって訳語の校訂を経たほか、原本に引用され1925年版に翻訳されたトロツキーの言論を削除している。原本に引用されたトロツキーの言論と51年版削除部分は次の通りである。項目の中に示す頁数は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（弘文堂書房、第13版）による。

1. 中篇第3章第4項における、「労働組織の問題」（トロツキー、『テロリズムと共産主義—カウツキーを駁す』の一章、『Soviet Russia』、Vol. IV. no. 3-6. 1921）の一部引用（356頁8行目—358頁5行目）。

51年版は、356頁の5行目から358頁5行目にあたる部分を削除。

2. 中篇第3章第4項における、露西亜共産党第9回大会（1920・3・21）におけるトロツキーの発言（Pasvolsky, 『The Economics of Communism』、1921）の引用（358頁8行目—同12行目）。

51年版は、358頁6行目から同12行目にあたる部分を削除。

3. 中篇第3章第4項における、『Socialism and Personal Liberty』（Dell, 1921）からの引用（364頁10行目—365同1行目）。

51年版は、364頁9行目から365頁1行目にあたる部分を削除。

4. 下篇第1章第1項における、「労働組織の諸問題」（トロツキー、『Soviet Russia』. vol. IV. no. 3-6, 1921）からの引用（410頁16行目から411頁9行目）。

51年版は、410頁13行目から411頁9行目にあたる部分を削除。

5. 下篇第2章第3項における、『Our Revolution』（Trotzky, 1918）からの引用（449頁8行目から450頁5行目）。

51年版は、449頁1行目から450頁5行目にあたる部分を削除。

6. 下篇第5章第8項における、『Our Revolution』（Trotzky, 1918）からの引用（554頁4行目—555頁1行目、この引用の内容は、5と同じ）。

51年版は、554頁1行目から555頁1行目にあたる部分を削除。

故に、1951年版におけるトロツキー引用部分の削除部分は、「序」（1950・10・23）に言う三ヶ所ではなく、六ヶ所である。（なお、トロツキー引用部分について、1925年版では原本に忠実に訳している。）

また訳語が51年版においてどのように一層「中国化」（「序」、1950・10・23）されたのだろうか。その例を挙げておく。最初に、「中篇 第2章 第4項 活動自体に伴う肉体的の苦痛及び快楽」の一部を任意にとりあげてみた。

1. 「労働の舞蹈化は二つの方面に行われる。一は一定の労働を簡単な肉体的運動の単位に分割することで、二はその運動を繰り返すために之に一定の調子を付けることである。労働の調子を取るために役立つもので最も簡単なのは、労働に伴うて自然に発する所の音響である。」
2. 「劳动之舞蹈化有两种方面：（一）是把一定的劳动分析为简单的肉体运动之单位。（二）是使运动反复时依一定的节奏。发生劳动之节奏的最简单的方法，是随劳动而自然发出的声响。」（1925年版。1932年版も同じ）
3. 「劳动的舞蹈化有两种方面：（一）是把一定的劳动分析为简单的肉体运动的单位。（二）是使运动反复时依一定的节奏。发生劳动的节奏的最简单的方法，是随劳动而自然发出的声响。」（1951年版）

ここでは古文的な「之」を「的」に改めているのにすぎない。

次に、「下篇 第3章 第1項 共産宣言に含まるる社会政策」から、『共産党宣言』の一部をとりあげてみた。

1. 「『一、土地所有権の廃止、及び地代は之を挙げて国庫の歳出に供すること。（中略）
『五、国家の資本と排他的独占とを有する国立銀行を設け、之によりて信用を国家の手に集中すること。（中略）
『十、総ての児童を公に無償で教育すること。現在の如き状態における児童の工場労働を廃止すること。教育と物質的生産とを連絡すること等。』」
2. 「『（一）土地所有权之废止，取其地租以供国库之岁出：（中略）
（五）设立有国家资本及垄断精神的国立银行以集收信用于国家之手中：（中略）
（十）一切儿童由公家无报偿地教育，废止目前现状的儿童之工场劳动，教育与物质的生活之联络等。』」（1925年版。1932年版も同じ）
3. 「『（一）剥夺土地所有权，以地租充国家支出之用：（中略）
（五）经过国家资本的与完全垄断的国家银行去集中信贷于国家手中：（中略）

（十）对于一切儿童实施公共的免费的教育。取消现有形式下的厂内童工劳动。教育与物质生产联系起来等。』」（1951年版）
この例では、言葉も句法も変えて訳しなおしていることが分かる。

また、この呉沢炎の校訂を経た改版重印本『社会組織与社会革命』初版がいつ出版されたのかという点について、上海商務印書館1951年7月第2版の奥付けによれば、「1951年4月第1版」と記されている（『郭沫若研究資料集<下>』<中国社会科学出版社、1986・8>の記載も同じ）。しかし、『郭沫若集外序跋集』（四川人民出版社、1983・2）の注釈によれば、1950年10月北京商務印書館改版重印としている。どちらに依るべきか、未詳。私は、とりあえず前述のように、この版本を1951年版と呼んでおく。

- (9) : 郭沫若は、『創造十年続編』（上海北新書局、1938・1、前掲）で次のように言う。

「河上肇博士の『社会組織与社会革命』は彼の個人的雑誌『社会問題研究』に発表した諸論文を編纂したもので、その平明で適切な筆遣いは日本の読書界を風靡したことがある。彼は論敵福田徳三博士の誤った理論を論破しており、日本の初期マルクス経済学説の高峰とみなすべきものである。『社会問題研究』は、発刊している時、私も断片的に購読したことがあるが、系統的本質的な認識にまで到達していなかったため、印象は薄かった。しかし作者の編纂になる文集を得て、また社会科学に対する私の憧憬と、さらにさし迫って解決しなければならない一家の生活の必要もあって、この翻訳を始めた。」

この記述によって、郭沫若は、『社会組織与社会革命』に関する若干の考察』の翻訳以前に、雑誌『社会問題研究』を断片的に購読していたこと、しかしその時の印象が薄かったことが分かる。

葉桂生は、「翻訳『社会組織与社会革命』所起的影響和作用」（前掲）において、1915年から1923年における郭沫若のマルクス主義に対する言及を解釈し、また1924年当初の情況について次のように指摘する。

「この時、郭沫若は政治的には儒家の伝統を受け継ぐことを主張し、経済的には社会主義を導きとすることを打ち出していた。一体、こ

のような体制が中国において真に実現可能だろうか。憧憬から、真の理解と運用にまではまだ一つの過程がある。この中で、郭沫若の一般の資料や現実の行動から考えて、まず最初に理論的洗礼を郭沫若に受けさせたのは、恐らく河上肇のこの本であったであろう。」

(10) : 郭沫若の「個人資本主義（原文、個人資本主義—中井注）」

（「孤鴻」、1924・8、前掲）の概念については、次のように理解しておきたい。河上肇は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』「中篇 第3章 社会主義制と個人主義的自由」において、アダム・スミスの理論等を念頭に置きながら、以下のように論ずる。個人主義的組織の下においては、その成員は自らの経済的生存について各自が責任を持ち、社会は責任を負わない。また一方、社会は成員個人の経済生活に対して干渉を加えない。この個人主義制の発展した特殊な歴史的形態として、資本主義がある、とする。また郭沫若は、「一個偉大的教訓」（1925・4・26、『晨报副刊』第96号、労働節記念号、1925・5・1）で次のように言う。

「或る者はアダム・スミスの学説を信奉する。個人の天賦の人権を尊重し、個人資本主義（原文、個人資本主義—中井注）に対して、いかなる機関も横暴な妨害を加えることを許さないだけでなく、さらにはそれを奨励して国家の富源を増やすように努力すべきだ、とする。」

この引用の後の部分で、郭沫若は「個人資本主義」を自由放任主義に基づいた資本主義としている。さらに、「社会革命的時機」（1926・1・19、『洪水』第1巻10・11期、1926・2・5）では、「個人資本主義（すなわち『現在の経済制度』である）」、とする。

以上のことから、私は、郭沫若の「個人資本主義」（1924年7月22日付け何公敢宛て書簡〈「社会革命的時機」所収〉では「私人資本主義」とも言う）の概念を、個人主義制的経済組織としての資本主義、という意味に理解しておきたい。故にそれは社会主義と基本的に対立する概念であり、また国家資本主義と対立する意味を含む概念である。

(11) : 郭沫若は、『創造十年続編』（上海北新書局、1938・1、前掲）で、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（1922・12）の内容に対し

て疑問に思う点を述べた後、次のように言う。

「これがこの本に対して私の満足できない所である。後に原作者河上博士は私に手紙をくれて、彼自身も満足できず、初版の刊行後、出版所に言って印刷発行を停止した、と言った。原作者の学者的良心は敬服に値するものである。」

この『創造十年続編』における記述について、三点確認しておきたい。

1. 『社会組織と社会革命に関する若干の考察』は、岩波書店全集版の場合第14版(1926・2・1)を底本としている。すなわちこの本は少なくとも第14版の時点までは出版されている。上記『創造十年続編』の記述によると、初版の刊行直後廃刊したようにも読めるが、実際にはそうではない。

2. 郭沫若は、「社会革命的時機」(1926・1・19、前掲)においては、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』(1922・12)について賛成しえない点を論じた後、次のように言う。

「これは、私が終始河上氏に対してうやむやのうちに賛成しえない点である。私は彼の原文を翻訳する時に、本来早くから手紙を書いて教えを請おうと思っていた。しかし今に至るまでまだ書いていない。だが最近彼は私に手紙をくれて、彼の『社会組織と社会革命』の一書は、現在の研究の到達点からすると、すでに満足できない所が多い、と言う。私がここで反駁している点も恐らく彼が満足できない所であるのかもしれない。」

ここからすると、郭沫若は、「社会革命的時機」(1926・1・19)を書く少し前の時点において、河上肇自らの、この本に対して不満である旨の手紙を受けとった、と思われる。(この方が時間的には齟齬が少ない。)

3. また郭沫若は、疑問に思った点についての問い合わせの手紙を河上肇に出さなかったことが分かる。これを出す以前に郭沫若は、河上肇から手紙をもらい、河上肇自身がこの書に対する不満の多い旨を述べた、とする。(『創造十年続編』<1938・1>では、この問い合わせの手紙を出したのかどうかについて、郭沫若は明言していない。)

恐らくこの三点については、「社会革命的時機」(1926・1)の記述の方が『創造十年続編』(1938・1)よりも詳細であり、且つ信頼性が

高い、と思われる。従って、『創造十年続編』（1938・1）にのみ依拠する「河上肇と中国革命」（小野信爾、『不屈のマルクス主義者 河上肇』＜現代評論社、1980・9・20＞所収）の、郭沫若と河上肇に関する記述には不正確な所がある、と思われる。またその点については、「河上肇の著作在中国」（呂元明、季刊『吉林師大学報＜社会科学＞』1979年第2期、邦訳、一海知義訳、『河上肇全集』第20巻付録月報、岩波書店、1982・2）も同じ。

- (12) : これは、ブラッケ（Bracke）宛て1875年5月5日付け書簡とともに送られた『ドイツ労働者党綱領評注』（『ゴータ綱領批判』）を指す。『河上肇全集 第11巻』（岩波書店、1983・1・24）の「解題」（山之内靖）を参照されたい。
- (13) : 郭沫若は、『社会組織与社会革命』（商務印書館、1925・5）において次のように訳す。（この訳文は日本ではなかなか見ることができないものなので、引用しておきたい。引用の仕方は注6と同様に、本来の繁体字を簡体字に改めた。以下同じ。）
- 「据其信札所说，马克思之所谓共产主义分为二期：第一期可称为半成期，第二期可称为完成期。在此等时期之前，由资本主义社会推移到共产主义社会的，更有一个过渡期——我觉得马克思是这样的想法。」（「下篇 第一章 从资本主义向社会主义推移之过程＜马克思之理想及其实现之过程＞ 第一节 从资本主义向共产主义之过渡期」）
- (14) : 「这从经济方面而言，是『革命的变革时期』；从政治方面而言，是属于所谓『无产者之革命的执权』的『政治的过渡期』。」（「下篇 第一章 第一节」）
- (15) : 「此从政治方面言时，是无产者执权之实行；从经济方面言时，是一切生产手段归于国有，革命的变革因以实现。」（「下篇 第一章 第一节」）
- (16) : 「过渡期完结后，社会始入于共产主义之时代。然而马克思思想之特征是注重在历史的发展的。（中略）然使他深信着完成的共产主义是不能一企而及的，于此他以为共产主义要先经过半成期，然后才能达到完成期。」（「下篇 第一章 第二节 共产主义之半成期」）
- (17) : 「过渡期完结后，于经济方面，一切的生产手段之国有始得实现。（中略）据马克思底见解是，依此生产手段之国家的统一与劳动之社会

的结合之『全生产方法之变革』，必然地招致巨大的生产力之增加。」

（「下篇 第一章 第一节」）

- (18) : 「在此没有以生产手段为私有，而收获『坐获收入』的阶级，一切的人都是社会底劳动者，与其所提出的劳动相应地从社会上各各取得一定的报酬。各个人『于一种形式内给与社会的劳动，于别种形式内又如量地从社会取回』，在这一点上，就说所谓『对于劳动全部收益的权利』是实现了的。」（「下篇 第一章 第二节」）
- (19) : 「共产主义『在共有的基础上发展』时，早迟社会之生产是会巨大地发展，将来保证各人底生活终不会是困难的事业了。那时候共产主义经过其半成期始入于完成期。」（「下篇 第一章 第三节 共产主义之完成期」）
- (20) : 「『生产力与个人之全面的发展同时增加，共同的富之一切的源泉十分流出之后，——其时社会始（中略）在其旗号上可以书着〈各应所能，各取所需〉（中略）的标语了。』」（「下篇 第一章 第三节」）
- (21) : 「社会革命之历史可以分为三时期。第一期是精神的准备时代，第二期是政治的战斗时代，第三期是经济的经营时代。这些区别就我所知道的范围在列宁底各著述中是表现得很明白的。」（「下篇 第五章 俄国革命与社会主义革命 第二节 社会主义革命史之三时期」）
- (22) : ヒルキットの書名は、河上肇の脚注によれば次のとおりである。
「Hillquit, From Marx to Lenin. 1921. P. 92」（下篇 第5章 第4項）郭沫若は、「希尔奎德『从马克思至列宁』」（「下篇 第五章 第四节 政治战斗（征服有产者）之时期」）と訳す。
- (23) : 「

{	精神的准备（宣传主义）时期	—	革命前之斗争期
	政治的战斗（征服有产者）时期	—	{ 革命之斗争期（实行政治革命） 革命后之斗争期（镇压反革命）
	经济的经营（经营产业）时期	—	（希尔奎德之期别中不舍此期）」

」（「下篇 第五章 第四节」）
- (24) : 「总之，政治革命是社会主义革命第二期之政治战斗期之开始，在这个时候，社会才走到马克思之所谓『过渡时期』。这个过渡时期随着第三期之经济的经营期之延长而延长。」（「下篇 第五章 第八节 经济的经营〈产业经营〉期与社会主义革命之成就」）

ここでは、河上肇は「経済的经营の時期」の一部を「革命的変革時

期」（「過渡期」）に入れているように受けとれる。しかし「経済的経営」の内容の幅をどのように解釈するかによって、後に挙げる郭沫若のような結びつけ方も可能と思われる。

- (25) : 葉桂生は「翻訳『社会組織与社会革命』所起的影響和作用」（前掲）で、社会主義革命の時期区分とその長期性について、以下のように河上肇と郭沫若の認識の共通性を指摘する。

「（河上肇は次のように考える。－中井注）当時、ソ連は政治革命の基本任務を完了した。レーニンの指導の下に、無産階級執権の新国家を建設した。しかし、経済革命はやっと着手したばかりである。社会主義革命の長期性についてのレーニンの表明によれば、ソ連の革命の徹底的成功は三期に分けなければならない、精神的準備の時代、政治的戦闘の時期、経済的建設の時代である。ソ連はすでにどのような状態なのか。郭沫若は言う、『現在のロシア革命は第二期を終えたのみで、なお第三期のもっとも長い時期が始まったばかりである』、と。」

- (26) : 「所谓过渡期要经过多少时候呢？共产主义底第一期又要经过多少时候呢？马克思对于此没有什么答辞。列宁也说 wir wissen es nicht und können es wissen（我们不知道，也不能知道）。」（「下篇 第一章 第三节 共产主义之完成期」）

- (27) : このことに関連して、河上肇は、『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（「下篇 第6章 第8項 社会主義への推移」）でレーニンの所論を次のように翻訳し紹介している。

「資本家的關係の此の状態から、社会主義への直接の推移を実現することは、果して可能であるか？然り、それは只一つの条件－それは驚くべき科学的労働の完成のお蔭で吾々が確知した所のもの－に於てのみ、或る程度まで可能である。その条件が即ち電氣化だ。

（中略）けれども吾々は、此の『一つ』の条件が少なくとも数十年（中略）に亘る仕事を要求することを、善く知っている、そうして吾々が此の期間を短縮し得るのは、英国、独逸、及び米国というような国々に於て無産者の革命が勝利を得た場合に限られる。」（郭沫若は上引の文章を次のように訳す。「俄罗斯全国一般所行的是资本制以前的关系，要从此状态一直推移到社会主义去，究竟是可能吗？

曰可能、于某种程度之内可能、但只需有一个条件—这个条件据我们所知道的是可惊的科学的工作之赐。这个条件便是电气化。〈中略〉但是、就是这『一个』条件至少也要费数十年、〈中略〉我们是很知道的、并且要英德美等国的无产者革命成功时、我们才能把这个时期缩短。』〈「下篇 第六章 第八节 向社会主义之推移」〉)

河上肇は、「マルクス主義に謂う所の過渡期について」（『經濟論叢』第13卷6号、1921・12・1、底本は、『河上肇全集 第11卷』〈岩波書店、1983・1・24〉）で、同上の文章を引いた後、次のように言う。

「之で見ると、露西亜の過渡期は、今からまだ少くとも向う数十年に亘るものだと云うことが分かる。」

- (28) : 「没有由科学上最新之智识所建的大规模之资本家的技术、没有系统的国家组织可以使数百万人服从于生产物之生产及分配的同一标准之严密的遵守时、社会主义到底是不可能的。（中略）

更次、没有国内的无产者之支配、社会革命也是不可能的。」

（「下篇 第六章 第三节 德意志的国家资本主义」）

- (29) : 「下篇 第六章 第2項 現時の露国における經濟層の種々」におけるこの部分は次のとおりである。

「一、家長的な、即ち甚しき程度に幼稚な、農民生産（訳者注、此等の農民は自足經濟を営む）。

二、小規模な商品生産（穀物を売る農民の多数は之に含まれる）（訳者注、此等の農民は其の生産物の一部を商品として売る、けれどもまだ資本主義化していない）。

三、私的資本主義。

四、国家資本主義。

五、社会主義。」

郭沫若訳「下篇 第六章 第二节 現時俄国经济层之种种」によれば、この部分の全体は次のように訳されている。

「（一）家長的、即程度甚低的农民生产。

（二）小规模的商品生产（此中包含贩卖五谷的农民之多数）。

（三）私的资本主义。

（四）国家资本主义。

（五）社会主义。」

- (30) : 「『国家的垄断资本主义是社会主义最完全的物质的准备。是走进社会主义的<大门>。它是历史这个阶梯中之一级。在此级与可以称为社会主义之一级间。没有别的阶段存在了。』」（「下篇 第六章 第四节 国家资本主义是走向社会主义之通路」）

なお、「さしせまる破局、それとどうたたかうか」（1917・9、『レーニン10巻選集』第7巻、大月書店、1969・11）によれば、次のとおりである。

「国家独占資本主義が社会主義のきわめて完全な物質的準備であり、社会主義の入口であり、それと社会主義とよばれる一段とのあいだにはどんな中間の段もないような歴史の階段の一段であるからである。」

- (31) : 「在物质的、经济的、产业的意义上、我们还没有走到社会主义底『大门』。并且我们不经过这个『大门』时没有路可以走进社会主义。」（「下篇 第六章 第四节」）

- (32) : 「资本主义比社会主义原是一种患害，但是资本主义比诸中世的制度、小规模生产、小规模生产者之分散所伴生的官僚政治、还要算是一种庆福呢。由小规模生产向社会主义之直接推移，我们还不能实现的时候，在那时候某种程度的资本主义乃小规模生产及交换之本质的产物。是不能避免的。在那时候，我们不能不把资本主义（尤其是把它导引到国家资本主义之路上的）当作小规模生产与社会主义间的间接的连锁，利用来作为提高我国生产力之手段、过程、方法。」（「下篇 第六章 第八节」）

- (33) : また郭沫若は、「到宜興去」（1924・12、前掲）で次のように言う。
「物質的に遅れた国家では、社会主義に対する憧れがやや先に生まれる。様々な経済以外の機縁によって、社会主義者が政治革命の成功を獲得し、その後物質的生産力を促進發展させようとする。その時には国家資本主義を除いて、他の道はない！聡明なレーニンがロシアを指導する根拠はこういうものである。私達中国は正確に彼から学び、正しく主義を把持し、計画を持つことにより、当然自由放任主義に反対しつつ、主義を同じくする人を糾合し、社会主義の政治革命を実行する。この革命が成功した後で国家資本主義を行うのである。これ以外に、私達にも別の方法はない。」

葉桂生は、「翻訳『社会組織与社会革命』所起的影響和作用」
（『郭沫若縦横論』<成都出版社、1992・9、前掲>所収）で次のよう
に指摘する。

「作者（河上肇を指す—中井注）はなお、マルクスの意見にもとづ
き、現段階の無産階級は、政治革命の開始により政権を獲得するこ
とまで可能であり、資本主義から社会主義への移行のために条件を
つくりだすことができると考える。（中略）『社会組織与社会革命』
の翻訳が郭沫若に与えた影響は通常のものではなく、これによって
郭沫若は、自らの一生における奮闘の目標（社会主義革命）を初歩
的に真に打ち立てた。」

- (34) : 既に注8で触れたように、改版重印本『社会組織与社会革命』（上
海商務印書館、1951・7、第2版）の「序」（1950・10・23）で、郭沫若
は呉沢炎の提案の一つ（下篇第6章を削除する提案）を退けている。

「（この第6章を—中井注）留めておくことが、本書全体の内容を
一層的確なものにさせるし、河上博士が当時一步邁進しようとした
方向を示すことにもなる。」（「序」、1950・10・23）

また注6で触れたように、郭沫若は第6章のレーニンの文章を原本に
より補って完全なものにしている。

こうした事自体が、レーニンの国家資本主義の位置づけに対する、
ひいては河上肇の「一步邁進しようとした方向」に対する、郭沫若の
変わらぬ高い評価を示す。

葉桂生は、「翻訳『社会組織与社会革命』所起的影響和作用」（前
掲）において、河上肇が『社会組織与社会革命』に関する若干の考察』
下篇第6章でレーニンの「農業税の意義」を翻訳した内容をとらえて、
「作者（河上肇を指す—中井注）は、『国家資本主義』は社会主義へ
移行する時の必ず經由する道だ、と考える」、とする。葉桂生は、レ
ーニンの言説を河上肇自身の直接の所論であるかのように紹介した上
で、次のように指摘する。

「河上肇はなおとりわけドイツをとりあげて研究する。ドイツのよ
うな国家は、資本主義経済がかなり発達しており、もしも一旦政治
革命の成功を獲得するならば、ただちに極めて容易に帝国主義のす
べての外殻を打破し、それほどの力を費やすことなく、或いは極め

て少ない困難のうちに、世界に真の社会主義国家の誕生を確実にもたらすであろう。河上肇の構想するこの計画はまったく成功しなかった。逆に、この時期においてドイツはファシズムの温床となったのである。」

「郭沫若も作者（河上肇を指す—中井注）のこの方法に賛成した。1925年10月に書く『窮漢的窮談』という一文で、郭沫若は次のように言う。『私達の知ってのとおり、ロシアは共産革命を実行している国家であるが、今、まぎれもなく国家資本主義を実行している。』（中略）中国も同じであって、もしも政治革命が成功したならば、国家資本主義を行うものであって、『それ以外の方法はない』。このような郭沫若の言説は、實際上中国の特徴をとらえていなかった。農民問題こそが国家革命の中心である。あらゆる問題は、革命勝利後の経済建設と改革を含めて、これを基準とする。中国のような国情において、『国家資本主義』を高談するのは時宜に合わないことであった。』

葉桂生は、郭沫若が河上肇の（レーニンのものである）国家資本主義の位置づけを受容したことに対して、上のように認めつつ、一方で郭沫若のこの考え方を批判している。

- (35) : 河上肇は、「マルクス主義に謂う所の過渡期について」（『経済論叢』第13巻6号、1921・12・1、前掲）において次のように言う。

「一定の社会は、社会主義の実現に必要な政治形態—即ち無産者の執権—を取ることに於て、マルクス主義に謂う所の過渡期に這入る。即ち過渡期の要件は、無産者の執権という政治形式である。」

また『河上肇全集 第11巻』（岩波書店、1983・1・24）「解題」（山之内靖）によれば、河上肇は1921年5月29日京大経済学会において「マルクスの所謂共産主義の過渡期と完成期」と題する講演を行い、その講演原稿には次のような内容がある、とする。

「（一）『各人の自由な発展が万人の自由なる発展の為めの条件である』（16<講演原稿頁数、以下同じ—中井注>）とするマルクス主義の理想=到達目標は『空想的社会主義中の共産主義者』（=ゴッドウィン）のそれや『[クロボトキンの] Anarchismと同じ』であり『何等新奇なものはない』（8）。そこでは、階級支配が無く

なると共に国家も消滅しており、assozierte Individuen [連帯した諸個人] による自由な自治の世界が現われている（16）。従ってマルクス主義は国家社会主義とは異なっている（29）。（中略）
（二）しかし、理想状態に達するための必要な手段として『無産者の独裁（執権）』という過渡期を置く点で『マルクス主義は無政府主義と異なる』（29）。」（「解題」）